

CarroMag.

学芸会って、
タイヘン!?



学芸会編

かなりゴキゲンなワークショップ巡回団

ワークショップ・レポート

人の子が？

石井先生…5人にしました。最初は1人の台本でいただいたんですけど、できるだけ増やそうと。

田幡…劇作家の方も、「書いたあとはお任せします」って言ってくださったので。

——劇場に相談したのは、今年から？

石井先生…九品仏では、毎年お願いしていたのは1、2年生だったと思います。でも今年は学芸会なので、学校から全学年のお願いをしました。だから、劇場との相談会を学年ごとで順番にする感じで実施しましたね。そのとき、4年生は台本もなにも決まっていない状態だったんです。なにをやればよいやら……と。そうしたら、劇場の方が「台本を書ける人がいるからできるかも」って提案してくださって、台本から書いて頂くことになったんです。

田幡…石井先生のほうからも「こんな話がいんじゃないか」ってご意見をいただいて、それをもとにや

りとりしながらでしたね。

石井先生…私は「喜劇がいいです」と言ったと思います。明るいクラスなので、面白く演じられたなって思っ。「幸せ者のハンス！」が、4年生に合っていたと思うのは、喜劇性もあると同時に、幸せについて考えさせられるテーマ性が入っていたところですね。

田幡…台本を書く前に、劇作家の瀬戸山美咲さんもクラスに来て、子どもたちの様子を見て書くことで、なんとなくクラスの雰囲気合うお話を考えてくださったと思います。

石井先生…「幸せ者のハンス！」は、人それぞれの幸せを考えるというテーマがあるのですが、台本をもらう日に、瀬戸山さんがいらして、子どもたちにお話してくださいました。作者から台本にこめられた想いを子どもに伝えていただくという、とても貴重な体験をしました。瀬戸山さんは本番も来てくださって、一人ひとりの役をご覧になって「とても合ってる、合ってる！」って仰

ていました。

松原小学校4年生の場合 ——工夫の仕方を提案

小泉先生…うちは単学級とは逆の大変さで、ひとつの劇に100人以上出すというのが、またそれはそれで大変なんです。

藤田先生…ひとりの台詞が5秒とかいう……

——やはり、配役とか台詞の数とかに、心を砕かれます？

小泉先生…はい。砕きます。そこは必死ですね。今回は台本を選んでから、子どもの人数に合わせて台詞を省いたり、くつつけたり、台詞はひとり2回まで、みたいな感じで分けました。

——他にはどんな悩みがありましたか？

小泉先生…去年までいた学校では、学芸会ではなく、学習発表会だったんです。今年、松原小に異動して4年生を担当することになって、ここでは学芸会をやるということだった



松原小学校

ので、台本選びなどは教員向けの研修会に行って決めました。

藤田先生…私は今年2年目で、持ち上がりの4年生を担当していますが、初めての学芸会だったので、演劇指導するとなったときに、どんなふうに指導したらいいのかわからなかったんです。特に舞台の使い方とか、舞台の奥行き出し方とかですね。そんなときにパブリックシアターの方に来てもらって、アドバイスしていただいたことがすごく活きましたね。

——学習発表会は学芸会と違うと仰いましたが、どういうふうに？

小泉先生…前任校の学習発表会では、国語の詩を音読したり、日本語の年中行事を調べたものを発表したりしていました。舞台上合唱隊のように並んで、劇みたいなものを入れながら歌を歌ったり、語りを入れたりしながら進めていく感じなのですが、演技や動きはあまり入りません。劇ではないんですね。

——藤田先生は、去年は学芸会はなさらなかったんですか？

藤田先生…はい。松原小は、展覧会と学芸会を交互にやるので。

田幡…九品仏小学校もそうしたスタイルですよ。だから去年、九品仏小に伺った時は、翌年の学芸会に向けてヒントになるようなことをやりました。劇場側としては、子どもたちと時間をかけて関係をつくれたのでよかったです。——松原小ではどのようなことをしたのですか？

小泉先生…去年は7、9、10月の3回、土曜授業の日に2時限ずつ、体育館での練習に1時限、来ていただきました。最初の7月は、子どもたちが身体で表現をする遊び的なこと、9月は体育館で大きな声を出すようなゲーム的なこと、10月に劇が決まって、学芸会まであと1か月だったので、立ちまわりを教えてくださいました。これがすごくよかったです。

田幡…立ちまわりの練習をしたあと、発表を見に行ったら、すごく上手くなって驚きました。

小泉先生…劇場からのアドバイスで、かなり変わったんですよ。戦いの場面があったのですが、私の発想だと、みんなが一斉に戦い始めるく

らしいか思いつかなくて、張り出し舞台も使うけど、それにしても狭いよね、どうしよう……とか悩んでいたら、こっちとこっちに分かれて、ダンスみたいに剣を引くとか、全員舞台から客席のほうを向いていて、一人だけ剣を振ると、みんな倒れるとかどうかな……みたいなアドバイスがあって、その場面がものすごくよくなったんです。またその場面を受け持っている子が、すごく頑張った。本当にかっこよくなりましたね。あれは感動ものでした。

山野小学校 2年生、5年生の場合 ——状況に応じて

菊地先生…山野小の場合は、どこかからの学年に毎年、パブリックシアターに来ていただくが続いていたので、今回も、引き続きという感じです。

——どのようなことをされたのですか？

菊地先生…山野小学校は、学芸会とか学習発表会といった名前はついていなくて、「山野フェスタ」というものがあるんです。2年生は4クラスありまして、子どもが140名ほどいるのですが、学年でひとつの劇をつくりました。

——2年生については、劇場からはどのようなアドバイスが？

菊地先生…昨年は「山野フェスタ」の直前に来ていただいたのですが、今年は早い段階から、パブリックシアターの蓄積を貸していただきたいなと思っていて、5月くらいから題材や台本について打ち合わせを始めました。早い段階で相談しておいてよかったなと思ったのは、台本の構成のしかたです。どんな劇であれ、場面ごとに人数を膨らませないで、子どもたちが練習、工夫できる

事例紹介

松原小学校4年生 [2クラス／巡回団の訪問全4回]

学芸会に向けて大きな声が出せるようにしたい、立ちまわりなど動きのあるシーンを工夫したいと要望がありました。楽しみながら演劇創作に活用することができるような手法を取り入れたワークショップを実施し、ワークショップで体験した手法を子どもたち自身が発展させ、学芸会で上演する作品に活かすことができました。

進行役…すずきこーた(演劇デザインギルド)、青山公美嘉(NPO法人演劇百貨店)

5月…学校から依頼。進行役に打診。	打合せ。先生方から、学芸会で取り組む予定の作品について伺う。
6月上旬…担任の先生、進行役、劇場スタッフで打合せ。	
7月12日…身体を使っていろいろな物になる活動。[1回目訪問]	10月4日…立ちまわりのシーンに活かせるような動きを試す [3回目訪問]
9月6日…ある詩を手がかりに、体を使って表現。[2回目訪問]	11月6日…進行役が本番に向けてのアドバイス。[4回目訪問]
9月上旬…担任の先生方、進行役、劇場スタッフで再度	11月14日、15日…学芸会本番!

事例紹介

山野小学校2年生 [4クラス／巡回団の訪問全12回]

様々な物語から劇をつくる体験をさせたいという希望とともに、「やまのフェスタ」に向けて協力してほしいと依頼がありました。夏休み期間中にも打合せを行い、上演する作品のイメージについて先生方と相談し、先生方と児童が共に納得して作品創作に取り組める方法、演出プランを提案。台本から作品創作にいきなり取り掛かるのではなく、台本の元となった物語の世界を楽しむところから活動することができました。

進行役…すずきこーた(演劇デザインギルド)

- | | |
|--|--|
| 5月…学校から依頼。進行役に打診。 | 9月9日…台本の原作となる物語を、短い劇にして発表。[7回目訪問／3組と4組で実施] |
| 6月6日…グループで「危ない!」瞬間を考えて表現する。[1回目訪問／3組と4組で実施] | 10月2日…各クラスの教室に分かれて練習。進行役は教室を歩き来して、演出のアイデアを提案。[8回目訪問] |
| 6月7日…グループで「危ない!」瞬間を考えて表現する。[2回目訪問／1組と2組で実施] | 10月14日…体育館で声を届ける練習のあと、教室で場面練習。[9回目訪問] |
| 7月7日…絵本の一部分を表現する。[3回目訪問／3組と4組で実施] | 10月21日…舞台上の立ち位置や移動の確認。[10回目訪問] |
| 7月8日…絵本の一部分を表現する。[4回目訪問／1組と2組で実施] | 10月27日…体育館で通し練習。そのあと、気になるところを止めながら練習。[11回目訪問] |
| 7月11日…教科書に載っている物語を劇にして、保護者に発表するためのお手伝い。[5回目訪問] | 11月4日…体育館で練習。音響、照明、小道具が揃いはじめる。[12回目訪問] |
| 8月下旬…「やまのフェスタ」に向けて担任の先生方、進行役、劇場スタッフで打合せ。 | 11月13日～15日…「やまのフェスタ」本番! |
| 9月4日…台本の原作となる物語を、短い劇にして発表。[6回目訪問／1組と2組で実施] | |

くらしい人数でつくるのが大事というアドバイスをもらったんです。それで、場面を切って増やして、ひと場面の人数が10人前後にしてみたら、場面練習がしやすくなりました。3場面ずつくらい練習を受けもつんですが、私がひとつの場面を見ている間に、他の2場面を子どもたちが自主練習することができたりして、練習の仕方がすごく変わりましたね。早い段階でそれができたことがよかったです。

④石井先生…140人が出る劇を、どれくらいまで分けたんですか？

⑤菊地先生…最終的に10の場面に分け、その他、ダンスを担当する子

もいました。

—5年生はいかがですか？

⑥小俣先生…「山野フェスタ」というのは、高学年は子どもたちが自分でやりたい演目を決めて、いくつかのグループに分かれ、4つの会場で同時に開催するという文化祭に近い内容のものです。パブリックシアターの方には、主に演劇を創作して発表するグループの演技指導というかたちで来ていただきました。とても勉強になりました。

山野小は特別なので参考になるかわかりませんが、山野フェスタは「子どもたちが自分で計画し、自分たちの力で作り上げていく」という

総合的な学習の時間のねらいにあった活動です。今年、私は12人くらいでやる劇と、お笑いとお笑いという2つの演目をもちました。体育館でやるのではなく、ランチルームなど学校の小さな場所で、25分の枠でやっていくんです。

小さい劇なので小劇と呼んでいますが、夏休みに、子どもたちに一応「やりたい脚本を書いておいで」という宿題をだして、集めてみて「これじゃだめだ」と。

一同…(笑)

⑦小俣先生…いや……ここが本当にすごくきつい。こちらから台本を出せば楽なんだけど、子どもたちに考

えさせて、作らせなければならないのです。最終的に子どもたちに色々聞いて、私がまとめてなんとか脚本を書きました。5年生から6年生になると、完全に自分でやりましょうという活動になります。そこでは、最終的な質の高さをねらいとするのではなく、子どもたちが自分で作りあげるという自主性を大事にしているのです。子どもも私も「分からないことしかない」という世界のなかでやっていたので、こーたさんからのアドバイスは、とても助かりました。台本も相談に乗ってもらえるんだったら、私なんか書くんじゃないんだってな、なんて今、思いましたが……。

—劇場からは、演技指導はしたんですか？

⑧田幡…演技指導というよりも、台本をどう見せると面白いのかを、こーたさんが色々提案して、繰り返して子どもたちのやる気を高めていくことをやっていました。

あとは「舞台上のここに物があるとやりづらいよね」といった、舞台を



山野小学校

つくるうえでの交通整理ですね。

劇場と学校演劇のこれから

—学校に劇場を呼ぶのは、各学年の先生の判断でできるんですか？

⑨藤田先生…松原小はそうです。学年でやりたいという声が上がれば、校長にお願いしてそこからという感じですよ。

⑩小泉先生…今更なんですけど、何回までなら学校に来られるよとか、逆に、来てもらったときの費用とか全く知らずにお願いだけしちゃったんですけど、何時間でも来ていただけるものなんですか？さきほど他の先生方が、台本を書いてもらったとか、相談に乗ってもらったとか仰っているの聞いて、「あ、そんなこともできたのか」って思いました(笑)。

事例紹介

山野小学校5年生 [4クラス(2回目、児童有志グループ)／巡回団の訪問全2回]

「やまのフェスタ」に向けて作品を創作していくことのきっかけとなる活動にしたいと要望がありました。“表現したいものごと”を伝えるための見せ方、舞台の使い方についてアドバイスしたことで、自分たちで考えた演劇をいかに工夫するか、自分たちで考えることができるようになりました。

進行役…すずきこーた(演劇デザインギルド)、南波圭(NPO法人演劇百貨店)

- | | |
|---|---|
| 5月…学校から依頼。進行役に打診。 | 10月23日…有志グループの活動を訪問し、練習に参加。 |
| 9月上旬…担任の先生、進行役、劇場スタッフで打合せ。 | 演出のアイデアや舞台の使い方など、発表に向けて必要なことを提案。[2回目訪問] |
| 9月16日…全4クラスを対象にワークショップを実施。[1回目訪問] | 11月13～15日…「やまのフェスタ」本番! |
| 9月下旬…担任の先生より、「やまのフェスタ」に向けて取り組んでいる子どもたちの有志グループに協力・アド | |

やまのフェスタの教育的価値

山野小学校校長 溝口純

山野小学校は大規模校で、一人一人のよさがなかなか発揮できない、個が埋没してしまう、といったことが課題としてありました。そこで、多くの子どもたちが、自分にあつためあてをもち、その実現に向けて、自分たちで努力、工夫して取り組める方式として、「やまのフェスタ」が誕生したのです。やまのフェスタは、1、2年生は従来の学芸会と同じように学年で一演目です。しかし、3年生以上は、学年の発達段階、児童の実態に応じて複数の演目に分かれて実施します。6年生は最大8演目になることもあります。そして、4会場（校庭、体育館、音楽室、ランチルーム）に分かれて、同時に開催します。それはあたかも高校の文化祭のような雰囲気です。ここでは、子どもたちは自分としてぜひ挑戦したいものを自分で選択し（**自己決定**）、自分たちが掲げた目標にむかって、自分たちの力で自主的に取り組んでいきます（**課題解決**）。これは当時誕生した総合的な学習のねらいそのものです。本校では、学校行事と総合的な学習の横断的な位置づけをしています。加えて、キャリア教育としての位置づけもしています。多くの子どもたちが自己実現するための道筋をここで経験していくのです。

もちろん、ただ子どもたちにやらせっぱなし、好きなことをただやればいい、といったことではそもそもねらいを達成できるわけではありません。教師の指導が大変重要になってきます。その子にあったねらいをもっているかを見極め、課題解決に対してどのように取り組んでいったらいいかのアドバイスをしたり、よりよい価値観を示したり、内容を高めるように指示したり、さまざまな視点で教師の力が求められます。当然、子どもたちの挑戦したい内容が多岐にわたれば、それだけ指導者が必要になり、教師だけで対応はできなくなります。そこで、地域、保護者にも協力を求め、フェスタボランティアを設置したのです。学校関係者を、教育活動に取り組むことはこれまでもクラス、学年単位ではおこなってきています。これを学校規模で行おうとした、かなり先進的な取り組みでした。地域、保護者の中にはかなり専門性をもった方々がいるので、その力をうまく活用することはこのフェスタにとってとても大切なことでした。

このような崇高なねらいや思いのもとスタートしたやまのフェスタも、今年で13年目になります。子どもたちは「フェスタはわたしたちの誇りです」と言っています。高学年の姿を、低学年はあこがれのまなざしで見ます。やまのフェスタを経験した子どもたちが、これからの人生の中で、表現することの喜びを、さらに自信をもって重ねていくことを心から望んでいます。

そこまでしていただけるなんて、みなさん知らないんじゃないかしら。なんでもありなんですね。

P田幡…いくらでも相談に乗りますし、「そこまではできません」と言うことはあまりありませんね。というのも、世田谷パブリックシアターは、区の劇場ですから、区の補助金でこうした事業を行っているのです。コミュニケーション能力を高める学習に力を入れる国の事業から予算も獲得しています。ですから、学校の予算内で相談していただければ大丈夫ですし、予算がない場合でも、やり方はあります。ただ「どうすれば生徒たちの声が、全員同じ大きさになりますか」と聞かれても、それはちょっと応えられません。「声が出しやすくなるような稽古方法がありますか」とか、「表現を楽しめるようになってほしいんですけど」とかであれば、いくらでもアドバイスに行きます。

△小俣先生…これは劇場にお願いするようなことではないのかもしれませんが、台本の倉庫がほしいです。台本選びがいちばんきついですよ……。いろいろな学校で学芸会をやるとき、台本をパソコンで打つわけじゃないですか。たとえば劇場が関わられたところの学校だけでも、台本をデータでアップロードしてもらって、「一学級用」「何年生用」「和物、洋物」とか（笑）、そのくらいの項目があれば、あとはアレンジして使えます。私が単学級でやった『夢から醒めた夢』は、もともととても長いストーリーで、東京学芸大学の附属がやった単級のデータがあったので、それを実態に合わせながらやりました。——学校の中では台本・戯曲の蓄積というのは、なかなか進まないのでしょうか。

△小俣先生…あるんですが、もっと量がほしい。たとえば去年やった演目は使えないので。

△小泉先生…少なくとも6年間はできないですね。——なかなか小学校の学芸会用というのは……アレンジという方法はあるでしょうけれど。

△小俣先生…『どろぼうがっこう』なんて学芸会でずっと使われてます。衣装の絵なんかでも一枚あれば、いくらでもアレンジできますよね。

△小泉先生…私たちがやった作品は『千夜一夜物語』みたいのをアレンジしたもので、児童文化部の演劇部の方が書いたものです。その方はアドレスを教えてください、データでも送りますと言ってくださいましたので、送っていただいた台本から要らないところを省いたり、付け足したりして、新たにうちの学校用につくりました。

——これから、劇場が学校演劇にどう関わってくれたらいいと思いますか？

◎石井先生…その先生の得意、不得意があるので、関わり方はその先生によると思いますけど「これが困った」というときに、演劇のプロとして「こういうやり方があります」という引き出しを見せていただければ、とても有り難いですよね。

△菊地先生…そう、手を差しのべてもらいたい時に、パブリックシアターと出会えるのは、すごく大きいと思います。

△小泉先生…山野フェスタは、毎年やるんですか？

△菊地先生…はい、そうです。

△小俣先生…私たちは、「劇を通して、子どもたちがなにをつかんでいくか」ということで勝負しているので、劇自体の成功や失敗の視点は異なってきます。表現するというこ

の楽しさを覚えてほしいというところが、最終的には願いとしてあります。なので、表現の幅を広げたり、表現の楽しさを遊びを通して教えてください。今のままでも十分な価値があります。今のままでも十分な気がしていますね。

——子どもたちが、表現を通してなにかを得ているといいですね。手応えは感じますか。

△藤田先生…学芸会が終わって、振り返りというのを書かせたのですが、人前で話すことが得意じゃないという認識のある子がいたんですけど、学芸会をやった「人前で話すことに、抵抗がなくなった」と、経験して捉えている子がいましたね。私としてはもっと役になりきってほしいという想いもあったんですけど、そういうところではなくて、単純に人前に出て話すことができるようになって嬉しかったと感じてくれた子がいたので、あ、そういうところでも学芸会というのは、いい経験になるんだなって。

△菊地先生…子どもたちが柔軟に人に関わるのが大切だって言われています。すぐにはないけれど、実際に劇をやってみると、子どもたちの中には「演技が上手くなった」という振り返りをする子もいれば、「協力できたのが楽しかった」なんて言う子も結構いるんです。子どもたちにはクラスでも「人との関わり力」を持ってもらいたいと思って、パブリックシアターに来てもらうねらいは、そこにもあります。パブリックシアターと協力して劇作を2年近く続けていて、子どもたちに、人と関わっていく力が少しずつ根付いてきているように思います。——みなさん、ありがとうございます。

地域の学校と劇場とをつなぐ巡回団

恵志美奈子（世田谷パブリックシアター学芸）

劇場が学校に行くようになったのは

世田谷パブリックシアターは、2003年度から、区内の小中学校で演劇ワークショップを行う『かなりゴキゲンなワークショップ巡回団』を始動しました。しかし突然ゼロからスタートしたわけではありません。きっかけは、英国ロイヤルナショナルシアターによる演劇ワークショップに、何年か続けてご参加くださっていた先生が、『総合的学習の時間』^{★1}で、演劇ワークショップをやりたい」とご相談してくださったことでした。しばらくして、2004年に世田谷区が内閣府より「世田谷『日本語』教育特区」^{★2}の認定を受け、2007年から区立全小・中学校で教科「日本語」が始まると、その中の「表現」の単元で演劇ワークショップの要素が取り入れられたこともあり、世田谷パブリックシアターは世田谷区の夏休みの教員研修を引き受けるようになりました。新しい先生と出会う機会も増え、研修を受けた先生方から「日本語」の授業枠で学校に招かれたりと、学校との連携も年々増えていったのです。

「コミュニケーション能力の向上」だけではなく

そして近年、演劇ワークショップは「コミュニケーション能力の向上」に役立つと謳われるようになってきました。2011年に文科省が発表した「コミュニケーション教育推進会議」の審議経過報告は、2016年度に改正される教育指導要領を見据え、グローバル化が進む21世紀の社会に生きる子どもたちには「コミュニケーション能力」が必要とし^{★3}、その能力向上の一助としてアーティストが学校へ行くことを提案しています。時をほぼ同じくして文科省では2010年度より「児童生徒のコミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験（芸術家派遣）」の事業が公募されるようになりました。今では、学校現場での演劇ワークショップといえば「コミュニケーション」だと想起されるようになりつつあります。

では、世田谷パブリックシアターはそのために学校で演劇ワークショップを行っているのかと問われれば、それは違います。否定しているわけではありません。ただ、演劇をすることで培われる体験を「コミュニケーション能力の向上」と限定して提案しないようにしています。演劇をつくるプロセスには、共に作業する仲間を知ることを、受け入れること、調べることを、意見を出し合うこと、人に伝えるために表現を工

【★1】「総合的学習の時間」自ら課題を見つけ、学び、考え、問題を解決する力の育成をねらいとして、各学校の特色を生かしながら横断的・総合的な学習を行う時間。2002年度の学習指導要領改訂に伴い導入された。

【★2】「世田谷『日本語』教育特区」構造改革特区制度とは、地域を限定した上で国の規制緩和を行う制度。教育特区として認定されることで、学習指導要領等によらない特別の教育活動の編成や、民間団体による学校運営等が実現可能となる。世田谷区は、「深く考える子どもを育成する」「自

分を表現することができ、コミュニケーションができる子どもを育成する」「日本の文化を理解し大切に子どもを育成する」という3つのねらいのもと行ってきた取り組みが2004年に認定を受け、2007年度より教科「日本語」を区立小中学校全校で実施している。

【★3】「21世紀型スキル」世界の教育関係者らが立ち上げた国際団体「ACT21s」(The Assessment and Teaching of 21st-Century Skills)によって提案された、21世紀社会に生きる人材に求められる能力。「思考の方法」「仕事の方

法」「仕事のツール」「世界の中で生きる方法」の4つのカテゴリーのもと、批判的思考力、情報リテラシー、コミュニケーション能力、協調性などといった10のスキルが設定されている。国際的な学習到達度調査・PISAにおいて、2015年より「協働型問題解決能力」が調査項目に追加される予定の他、日本においても、2015年に本格的に開始された学習指導要領改訂作業の中で「課題解決型学習」(アクティブ・ラーニング)の充実策が議論される等、「21世紀型スキル」は近年の教育界において育成すべき重要なものとなっている。

夫すること、身体を動かすこと等、さまざまな要素が含まれており、それぞれに気付きや学びがあります。そのため、演劇をしたことで、こういう効果があった、成果が出たなどと言ってもらえることもあります。しかし、それは、学校の教育現場で先生方が抱えている課題があるからこそ、見つけてくださる、その課題にとっての効果や成果なのだと思います。異なる集団においては、たとえ同じ内容のワークショップを実施しても、おそらく違う効果や成果が出てくるでしょうし、効果や成果を事前に打ち出すのは難しいことです。

既存の演劇観に阻まれない表現を

演劇を学校で活用していただくには、まずは、「自分たち（学校）の課題解決のために外部の専門家（劇場）に相談しよう！」と主体的に動くことができることが全てのスタートです。そうして初めて、劇場は、先生方の教育現場での課題に演劇の側からみた提案をすることができ、また学校側も、劇場や演劇をどう活用していくかを積極的に考えられるのではないかと思います。このように地域の公立施設である学校と劇場がそれぞれの専門性を活かしながら協働することで、各々の現場や地域社会は、より有機的に絡

み合い、重層的な深みを増していくように思います。

さて、今回ご紹介したのは、そうした「かなりご機嫌なワークショップ巡回団」の中での学芸会・学習発表会でのサポートです。学校の先生の中には、演劇を観たことがない方も、自分で作ったことがない方も、また、演劇体験があっても、既存の学芸会や演劇の形にとらわれてしまうが故に、いろいろと悩みを深めておられる方もいます。そんな先生方から相談を受ける場合、劇場が提案するのは、新しい演劇の形、既存の演劇観に阻まれない表現の形だといえるでしょう。2015年の現在、世界中で多様な演劇の形が生み出されているにも関わらず、世の中を席卷しているのは未だに日本で稽古して朗々と語るという演劇像です。演劇の形はもっと自由で、何でもありなんですよ、どんな表現の形もあるんですよ、とちょっとお伝えすることで、先生方の学芸会・学習発表会の捉え方に違う視点がうまれるように思います。そして、新しい演劇観をヒントにした学芸会・学習発表会の形が出てきたり、逆に学校や子どもたちの創造力から新しい演劇の形を提案していただけるようになっていくことを密かな目標に、世田谷パブリックシアターは学校に出かけています。

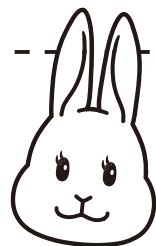


学芸からのお知らせ

「かなりゴキゲンなワークショップ巡回団」

実施校募集中!!

お待ちしております



新年度のクラスづくり | 教科・学習に活かす | 学習発表会
に活かす | 学芸会に活かす | 観劇して、話し合う etc...

世田谷区内小中学校で実施校を募集中です。新年度のクラスづくり、教科・学習での活用、学芸会や学習発表会へ向けて等々、学年、クラスの状況に合った内容のワークショップが実施可能です。「かなりゴキゲンなワークショップ巡回団」のご依頼は、一年中いつでも受付しております。お気軽にご連絡ください。

TEL 03-5432-1526
FAX 03-5432-1559

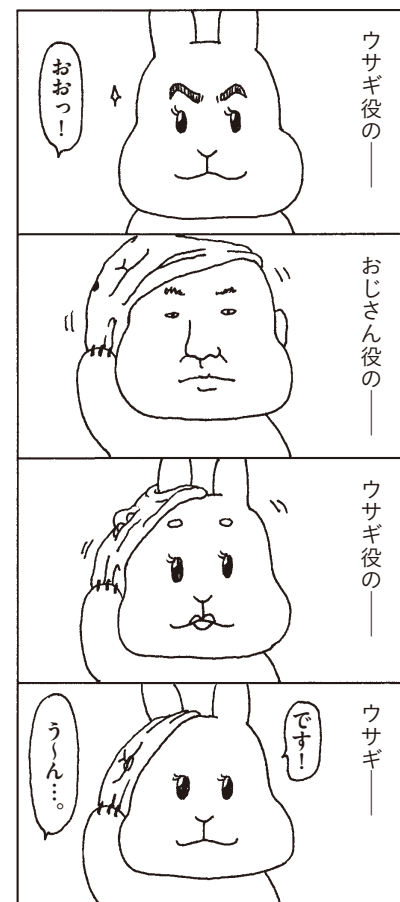
世田谷パブリックシアター学芸
担当: 田幡(たばた)

学芸スタッフから

★3月に引っ越しました。人生で6回目です。これだけ経験を積めば、そろそろコツをつかみそうなものなのですが、やはり今回も大変でした…。なぜ、毎回性懲りもなく、大変な目に合うのか。ちょっと考えたら分かりました。私が1時間で終わると思った作業は、4時間かかる。これからの生き方を考えさせられる引っ越しとなりました。[くに]

★今、キャロットタワーの1階に、道案内の立看板に向かってものすごい勢いで鬼のような形相で両手パンチを繰り出している小学生男子(たぶん低学年)がいました。何をそんなに憤っているのかい……と聞きたくなる激しさでしたが、特に深い意味はなかったのかも。それでも、あれくらい一所懸命だと、つい、見ちゃいますね。[ぶく]

たまにはこんな役 #7



またマスクネ?... つづく

編集後記

今号は小中学校を訪問する「かなりゴキゲンなワークショップ巡回団」の活動から、特に「学芸会・学習発表会」にフォーカスしました。学校や先生によって抱えている悩みはさまざま。世田谷パブリックシアターの巡回団は、そのお悩みに合わせてフレキシブルに対応する愉快な一団(?)です。まずはお気軽に劇場までご相談ください。

わたし自身は、小学校は受験戦争まっただ中、中学校はまあ暗黒時代と呼んでもいい感じだったので、もしもあの頃に演劇や、それに関わる不思議なおトナたちに出会っていたら、いくらか救われたかもしれません。今でもきっと、そういう何かを求めている子どもたちはいるはずですよ。

先日、区内の小中学校を別件で訪ねた際に、一緒にいた学芸スタッフ(通称にらだい)を見つけた子どもが「あっ、にらだい〜、今日は何しに来たの?」と駆け寄ってきました。学校に誰もが自由に出入りできればいいとは思いますが、いちおうの身分証明を得た風変わりなおトナがいるのは、悪くないのかも……。たとえば柴又の寅さんとか、ジャック・タチの映画に出てくるユロ伯父さんみたいな存在は、子どもや地域社会にとって大事かもしれないなあって思います。[ちから]

[キャロマガ]

Vol.7 / Mar.2015

発行日
2015年3月12日

発行
公益財団法人せたがや文化財団
世田谷パブリックシアター
〒154-0004
東京都世田谷区太子堂4-1-1
Tel. 03-5432-1526
http://setagaya-pt.jp

編集
藤原ちから、落雅季子(BricolaQ編集部)
大谷薫子(本のモ・クシュラ株式会社)

企画
恵志美奈子、九谷倫恵子、
田幡裕亮、福西千砂都、蕨澤大地
(以上世田谷パブリックシアター学芸)

地図作成
落雅季子(BricolaQ編集部)

デザイン
ウチカワデザイン

印刷・製本
株式会社リヒトプランニング

協賛
『TORAY』 東レ株式会社

後援
世田谷区

世田谷パブリックシアターとは

世田谷区がつくり、(公財)せたがや文化財団が運営している、演劇やダンスのための専門劇場です。三軒茶屋のキャロットタワーの中に、世田谷パブリックシアター(約600席)、シアタートラム(約200席)の2つの劇場と稽古場、作業場などを擁し、ワークショップやレクチャーなどの参加体験型事業にも力を入れています。

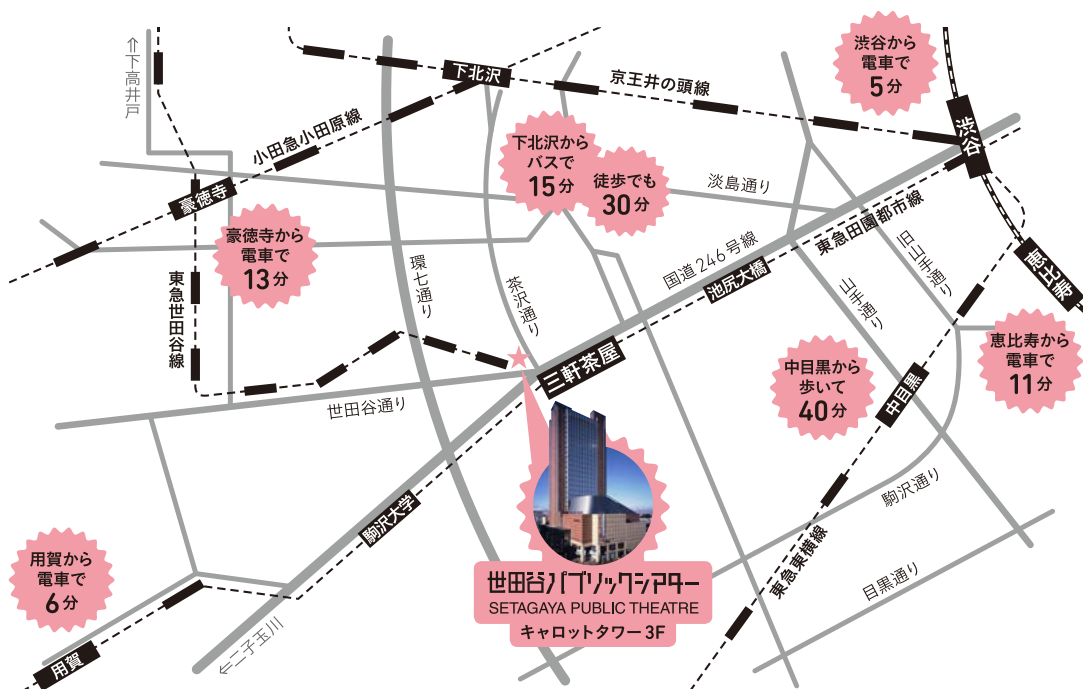


世田谷パブリックシアター(主劇場)



シアタートラム(小劇場)

世田谷パブリックシアターへのアクセス



お問い合わせ **世田谷パブリックシアター**

〒154-0004 東京都世田谷区太子堂4-1-1 キャロットタワー 5階

Tel.03-5432-1526 (代表) Fax.03-5432-1559

<http://setagaya-pt.jp>

世田谷パブリックシアターは、東京都世田谷区太子堂の三軒茶屋駅にある26階建ての高層ビル、キャロットタワーのなかにあります。東急田園都市線、東急世田谷線三軒茶屋駅と直結しています。